

栄光園だより
第121号
2020年10月31日発行
発行
社会福祉法人 栄光園
別府市南荘園町3組
〒874-0904 電話 (23) 2827
http://www.eikoen.jp/
編集 広報誌編集委員会
印刷 大野印刷株式会社
別府市青山1-7 電話 (21) 0505

コロナ禍のなかで

社会福祉法人 栄光園

児童養護施設

栄光園

施設長

岡田豊弘



日常を一変した天災

百年に一度といわれる天災は、我々の日常を一変しました。台風のように、すぐに過ぎ去り、いつも通りの日常が戻ると、当然思っていました。しかし、その日常は新型コロナウイルス感染者がでた都道府県や感染者数を過敏に確認する毎日となりました。県内、市内に感染者が出れば、子どもたちには施設外に出ることを禁じ、子どもや職員に発熱者が出れば、ホーム(子どもが生活するお家)から出ることを禁じました。検温、うがい手洗い、手指消毒、マスク着用、三密を避けると徹底した感染防止対策をとりました。「子どもの命を守るため」といいながらも、万が一の場合の影響は計り知れず、日々新型コロナウイルス感染者が出た施設にならないように毎日祈っていたのは紛れもない事実でありました。

コロナ禍での卒園・入所

さて、昨年度、5名の子どもたちがコロナ禍の中で当施設を卒園(退所)しました。例年、卒園する子どもたちを盛大に祝う会を催します。彼らは真新しいスーツを着て、社会で貢献する意気込みをみんなの前で述べ伝えて、卒園していくのですが今回はできませんでした。残

不安や恐怖の日常の中、長年にわたり支援していただいている方、近隣の地域の方々、その他あらゆる方面より励ましの電話や手紙やメール、そして感染対策の医療衛生用品や食料品、衣料品や雑貨のご寄付が毎日届きました。コロナ禍での救いは皆様からの「あたたかい眼差し」でした。手作りマスクのプレゼントは1000枚を優に超え、子どもたちは可愛らしいマスクをつけて元気に登校しています。

念でなりません。しかし、5名ともに置かれた職場や専門学校で立派に咲いています。農業に従事する若者は猛暑の中で、袖子や野菜をつくっています。「ただいまー」と言って、真つ黒に日焼けした笑顔を私に見せてくれます。

5名を社会へと見送った後、新しく5名の子どもたちが当施設での生活をスタートしています。新しく入所する子どもたちはそれぞれ6軒の独立したホームで生活します。このコロナ禍により、学校にも、外にも出ることができずホームの仲間と過ごす時間が長かったことや、憎むべきは「コロナー」という水面下のスローガンがあり、既に所属意識は強く、「〇〇ホームの〇〇です」と私にも挨拶をしに来てくれます。

出身者を孤立させない

このコロナ禍の中、当施設出身者の2名の方が相次いで自死いたしました。30代、40代の働きざかりの若者です。彼らは、生後間もないうちから乳児院、そして児童養護施設で生活し、社会に巣立っていきました。しかし、彼らの人生の半分が当施設で過ごした短い生涯となっしまいました。私にとりまして、寝食をともにし、同じ時代を過ごしました

出身者にとつての卒園は、一人で生きていくことを意味していたと思います。高校を中退し、数日中に就職先を見つけ、そのまま社会に出る者も当時は多くいました。自ずと疎遠になりました。彼らの遺骨をこの数か月の間で2回拾うことになった事実は、社会に巣立った出身者たちの孤立しない取組につながりつつあります。彼らの死によって、これまで疎遠だった出身者が一同に集まり、孤立しないよう、連絡先を交換し合ったこと、出身者同志のつながりや絆を深めていくことと立ち上がっている若者が出てきたことは、せめてもの救いであり光です。心からご冥福をお祈りいたします。

種を蒔く人

最後に、聖書の中に「種を蒔く人」のたとえがあります。ある人が種を蒔きます。道端に落ちた種は鳥が来て食べてしまいました。石だらけで土の少ない所に落ちた種は、すぐに芽を出しましたが、日が昇ると焼け、根がないために枯れてしまいました。茨に落ちた種は、芽を出したものの茨が伸びてふさいでしまったので実を結びませんでした。最後の良い土地に落ちた種は、芽生えて育つて実を結び、30倍から100倍の収穫をもたらしました。

良い土地に蒔かれた種がしっかりと芽生え育って実を結ぶように、感謝の心、素直な心、小さく弱い人を大切する心を持ち育むことで、このコロナ禍の山を乗り越えていきます。

